

佐渡東海岸の一漁村における

信仰と生活組織

新潟大学 佐藤 康行

漁村は農村と異なつて、個々の村々がきわめて個性的であるといわれている。そうした個性は、漁業生産の種類と漁業組織が単に相違している点ばかりでなく、長い歴史を経て存在している生活組織とそれに媒介された信仰の体系にも関わっている。本報告では、漁村の村落生活をとらえるにあつて、生活組織と信仰体系からアプローチしてみたいと思う。

調査対象地は佐渡の両津市大川地区で、半農半漁の漁村である。かつては部落内で婚姻が結ばれる一方で、分家慣行はあまりみられなかった。「重親類」は本分家関係から成っているのではなく、数世代にわたる婚姻関係から成っている。

かつてはスケト漁やシイラづけ漁、それにイカ釣がおこなわれてきた。イカ釣はほとんどの家でおこなわれ、家計を支えてきたものといわれている。スケト漁とシイラづけ漁は近世以来おこなわれてきたが、これらは必ずしも重立がおこなつたわけではなく、寺泊や出雲崎などと違つて株の成立をみなかったのである。ところで、昭和四十九年から漁港の建設が始まつて現在も進行中であるが、地元負担金は部落の字費で一部たてかえてきた。非漁家であっても今後漁業をするようになるかもしれない、そのために権利を残しておいたほうがよいということで、部落で取り組んできたのである。部落が地先漁場の利用を介して統合されているといえる。また、部落で漁村念仏や魚供養もしている。

農家は全戸のうち三分の二位であるが、農家組合が部落とは別につくられている。滅反は各戸ごとに実施してきた。

二

大川は東組と西組（二つを一緒にして浜組という）、それに離れた台地上にある野城組の三組から成っている。それぞれ組有の地藏堂をもっている。各組とも組有の山林があり、現在でも「皆済」をおこなっている。組は部落の「議員」や氏子・檀徒の総代、さらに農家組合の委員などを選出する母体になっている。字費も各組ごとに「年番」が徴収しているばかりでなく、老母連の念仏や小正月のトウド行事も組々に分かれておこなわれている。各組ともほぼ同数の戸数から成っており、部落を運営するにあつて便利のため、組による分類が基準になつたのであろう。

しかし、年中行事では浜組と野城組で相違しているものも少なくない。野城組には地藏祭りがあるが、浜組にはない。浜組は火付け

の念仏をおこない、東組と西組別々に夜番廻りがある等。また、現在部落で生活改善の申し合わせをおこなっているが、野城組の「触継定」(明治二十年)がある所からすると、生活改善(冠婚葬祭の賄い)もかつては浜組と野城組で別個に取り決められていたと思われる。さらに、村境ばかりでなく浜組と野城組の境にも正月に祈禱札が吊され、祭礼時に鬼太鼓が踊られている(悪魔払い)が、これらは生活空間を儀礼的に示している(浜組には浜組有の山林がある)。歴史的には、野城は浜組の枝村と考えられる。

三

大川では十五年位に一度ずつ「護身法」がお寺(真言宗)でおこなわれる。一週間(最近は三日間)寺にこもり、身を潔斎することにも、儀礼的に再生して印を伝授される。一生に一度はしないと一人前ではないといわれる。「護身法」は、山伏の山岳修行にあたり呪験力を獲得する過程と考えられる。

男子は生まれたらすぐにトウドの一員になる(トウドの加入順が、部落会の席順になる)。中一の男子が「一番大将」になって、一週間(現在は五日間)トウド小屋でおつとめをする。そして、正月の十六日に鳥追いをして終る。これは、靈力のある言葉を唱えることによって靈力を身につけ、鳥追いをしていると考えられる。

漁師のほとんどは善宝寺を信仰しており、竜王講をつくっている。老母連は毎月善宝寺念仏を組ごとにおこなっている。善宝寺(竜神信仰)を信じていれば必ず見返りがあるという。海上で困った時、善宝寺の札を流して竜神に祈願する。また、大病などをして困った時には、自分の守り神をお祀りし、願をかけ念仏を唱える(守り神は、地藏、馬頭、観音、猿田彦など)。地神がいる家は、地神をお

参りする。名主をつとめ、有力な重立の家であった家には、海からあがった蛇が祀られている。ここでは詳細な説明は省かざるをえないが、善宝寺信仰や守り神の信仰は真言宗の土壌の上に成りたっている。祈禱念仏は個人、親類、組、浜組、そして部落に至るまでおこなわれている。信仰の側面から漁民の村落生活をとらえることは、漁民の理解にとってのみでなく、漁村の「文化」を理解する上で重要である。